

2025 年から 2040 年を見据えた
地域包括ケアシステムと在宅医療、そして医療専門職に求められる心構え
躍進する臨床検査～在宅で活躍する臨床検査技師を目指して～

◎次橋 幸男¹⁾

天理医療大学 医療教育・研究センター¹⁾、公益財団法人天理よろづ相談所病院
在宅世話どりセンター¹⁾、患者総合支援センター¹⁾

本講演では2025年から2040年を見据えた①地域包括ケアシステムの背景と将来像、②「生活」と「看取り」を支える在宅医療の展望、そして③臨床検査を含めた医療専門職全体に求められる心構えについて解説する。

① 地域包括ケアシステムの背景と将来像

日本は、諸外国に例をみないスピードで高齢化が進行している。このような中、団塊の世代が75歳以上の後期高齢者となる2025年を目途として、地域包括ケアシステムの実現に向けた取り組みが行われている。地域包括ケアシステムとは「高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制の構築」を目指したものであり、各地域における「生活」と「看取り」が意識されている。この背景には、後期高齢者の増加、高齢者単独世帯や独居世帯の増加といった人口構造や世帯構造の変化が都市部を中心として生じてくること、これらの変化には地域性があり、各地域の状況と資源に応じた対策が求められていることに留意すべきである。

② 「生活」と「看取り」を支える在宅医療の展望

地域包括ケアシステムの「包括ケア」とは、保健・医療・福祉が一体的に提供されることを意味している。医療の歴史を振り返ると、医療は疾病の診断・治療を目的として発展してきたといっても過言ではないだろう。特に20世紀後半からの医療技術の進歩は目覚ましく、病院という「生活」から切り離された空間において、高度な医療機器を用いた医療専門職による科学的な検査・治療が提供されてきた。内科医としての私自身の診療経験を振り返っても、医学的妥当性を重視する中で、患者が退院した後の生活や通院が困難な状況に

対する配慮に欠けていたと感じている。しかしながら、地域包括ケアシステム時代においては「生活」を共通の目的として、保健・医療・福祉との連携・一体化が急速に進んでいる。特に、「生活」の場において医療面から患者の生活を支える在宅医療の発展は目覚ましく、様々な医療専門職、ケアマネジャー、介護職、福祉職、住民が協力して、「生活」と「看取り」を支える地域づくりが進められている。本講演においても地域住民の「生活」を支える在宅医療の具体例を紹介する。

③ 臨床検査を含めた医療専門職全体に求められる心構え

2025年から2040年にかけて、後期高齢者世帯の独居化、認知症患者の増加、通院困難、介護者不足といった「生活」上の課題がより顕在化する中で、私たちは団塊の世代の「看取り」を現実的に経験することとなる。これらの諸問題を、医療技術の進歩だけで対処することは不可能であり、保健・医療・福祉・介護に関わる専門職と行政、そして住民らが協力して地域包括ケアシステムを進化、深化させていかなければならない。このような状況において、医療者には自分たちの働き方を地域ニーズに適応させて変えていく心構えと、技術革新や多職種・多施設間連携を通じて「生活」と「看取り」をより効率的、効果的に支援していく姿勢が求められるだろう。講演では、私がこれらを想定して行ってきた臨床検査科学生、医学生、看護学生、研修医、病院職員に対する各種研修についても紹介する。